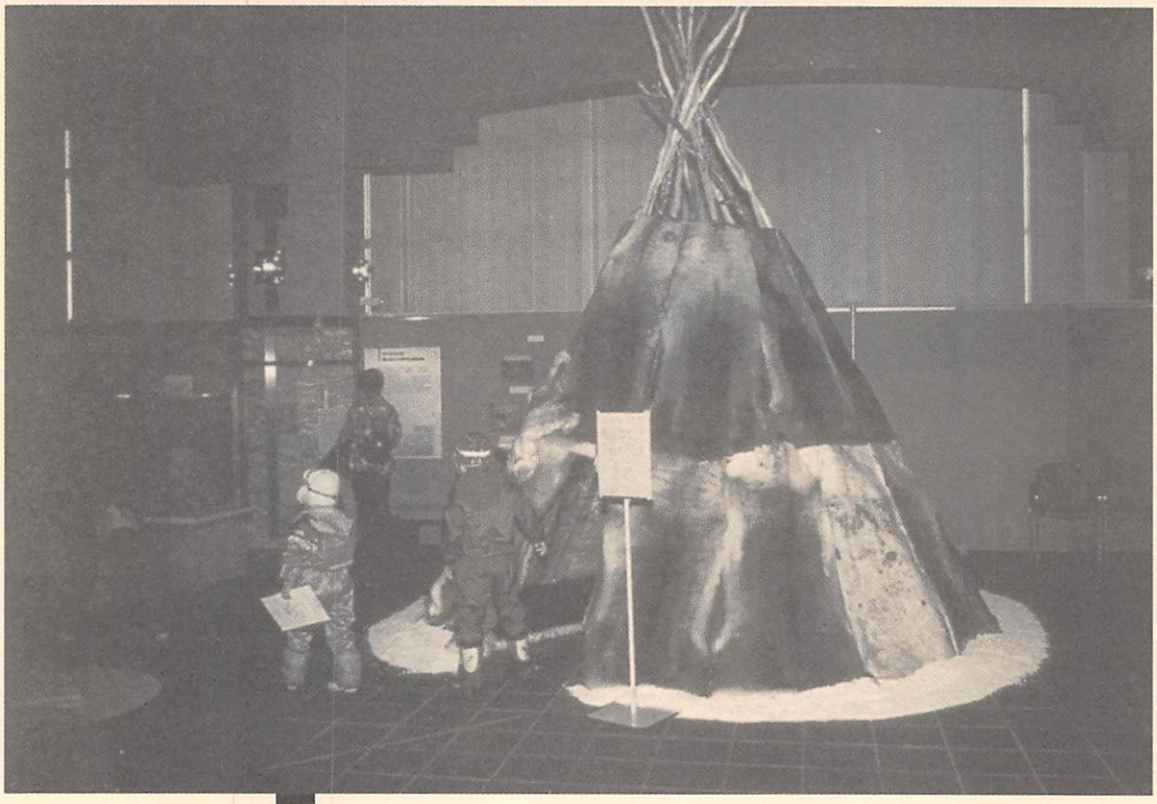
ISSN 0917−4729

北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples



テント
サミ
フィンランド
高さ　400cm
直径　350cm

北方民族博物館だより
−第25号−

企画展「作ってみよう・入ってみよう・きたのすまい」　2
講座「北方民族のことば」　4
参加報告　5
　氷海の民シンポジウム
　二風谷アイヌ文化博物館シンポジウム
News　6

平成９年２月４日～３月16日

「作ってみよう・入ってみよう・きたのすまい」

２月４日から３月16日まで、当館特別展示室において、企画展『作ってみよう・入ってみよう・きたのすまい』を開催しました（写真１）。

写真１

北方地域には伝統的な住まいとして、円錐（えんすい）形の木組みをトナカイ皮などで覆った「テント」や地面を掘り下げて床を作り屋根を土で覆う「竪穴（たてあなし）式住居」、木を組み上げた「平地式住居」、雪のブロックでつくる「雪の家（イグルー）」などがあります。寒さに対する工夫や生業との関わりなどから、民族ごとにその環境に最も適したタイプの住まいが生み出され、使われてきました。

今回の企画展では、北方地域で暮らしてきた人びとの、このようなさまざまなタイプの住居を、実物資料や住居模型、写真パネルなどで紹介しました。模型は建築家宮崎玲子氏の製作によるもので、写真パネルは野外民族博物館リトル・ワールドと昭和女子大学スチュアート　ヘンリ氏から提供を受けました。

＊　　＊　　＊

北方に暮らす人びとの多くは、伝統的な生業として狩猟や漁撈（ぎょろう）、トナカイ飼育などを行なってきました。その形態によって一定期間定住したり、季節的に移動したりする必要がありました。北方の人びとが利用する住居のタイプは、大きく三つにわかれます。展示資料のいくつかをタイプごとに紹介しましょう。

一つめはテントです。狩猟を行なう人びとが夏になって、一つのところに留（とど）まっていた生活から移動生活に移る際に利用したり、一年中移動をしながら狩猟やトナカイ飼育をしている人びとが使う住居です。テントは組立や解体が簡単で移動生活に適し、北方地域で最も広く使われているタイプの住居です。

展示したサミのテントは当館の収集資料です（表紙）。スカンディナビア半島の森林で暮らす彼らが漁撈や小規模なトナカイ飼育を行なう時に用いるものです。移動するときは、骨組みとなる木材はそのままにし、覆いに使われているトナカイ皮だけを持ち運びます。アメリカ大陸中央部の大平原に住むインディアンが使っていたテントはティピといいます（写真２）。軽くて持ち運びに便利なため、移動をしながらバッファローを狩猟すると

写真２　ティピ

いった生活に適していました。かつてはバッファローの皮で覆っていましたが、のちにキャンバス地が多くなりました。また、生活様式の変化にともない、現在ではテントは使われていません。展示したティピは宮崎氏製作の1/10の模型で、テントのそばで女性が立ち働く様子を見て取ることも出来ます。

ウマ、ウシなどを放牧し、それらの乳、肉、毛皮などを利用しているモンゴル民族は、扉や窓、屋根のついた大型のテント「ゲル」（中国語で「パ

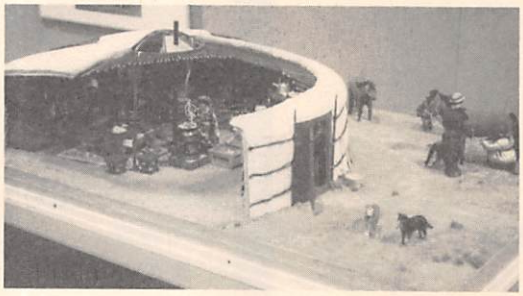


写真３　ゲル

オ」)をいまでも利用しています（写真３）。ゲルの壁は折りたたみ式の構造になっていて、組立や解体がとても便利になっています。普通４、５人で30分程度あれば解体できます。宮崎氏のゲル模型は、ご自身が現地に赴いて調査した後に製作したもので、細部にわたって精密に作られています。入口の右側が女性の場で、食器や鍋などが置かれています。外では男性たちが馬を扱い、テントの中では女性が食事の支度をしている様子が示されています。

北方の住居の二つ目は、主として冬の間に狩猟を行なう人びとが長期間生活するためのベースキャンプとなる竪穴式住居です。このタイプの住居は保温性に優れているのが特徴です。今回の企画展では、このタイプの住居は当館常設展示にあるイヌイトの竪穴住居ジオラマを、イラストパネルで紹介しました。主室（居住空間）の床面を掘り下げ、住居全体を芝土（永久凍土の表面に生育している短い草を含む粘土状の土）で覆い、部屋を暖かくしています。また、通気用の穴やあかり採りの窓は小さく、部屋のなかの暖かい空気がもれにくくなっています。

三つ目のタイプは、高床式の倉庫などが付いた平地式の住居です。この住居形態は北太平洋沿岸地域で漁撈を行なう人びとに見られます。

アイヌの住居は「チセ」と呼ばれています（写真４）。一般にひと間作りで、屋根や壁は茅や笹、樹皮で葺いています。入口には風や雪から家を守るために前室が付いています。

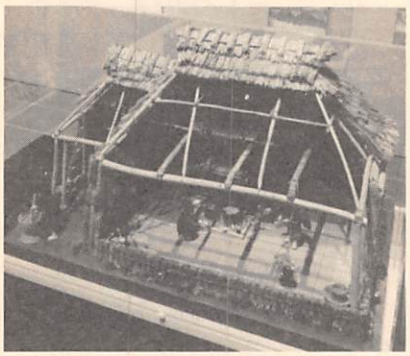


写真４　チセ

家の中央には炉があります。自在かぎに下がった鍋で煮炊きするだけではなく、炉はアイヌから最も尊ばれている火の神の住みかでもあります。宮崎氏製作のチセ模型は、建物構造がわかるとともに内部で食事の支度をしている女性たち、もの作りをしている男性が描かれています。

＊　　＊　　＊

企画展の開催に併せて、博物館の前庭では小学生などが製作した雪の家「イグルー」を展示しました（写真５）。また期間中、小学生を対象にした「博物館クラブ」では、イグルーやテント作りをペーパークラフトで体験しました。

写真５

今回の企画展には、この季節・この地域の風物となった流氷を見る人たちを中心に2,000人を越える観覧者を迎えました。

宮崎玲子氏製作の模型について

模型を製作した宮崎氏(東京都在住)は建築家で、これまでに20以上の地域や民族のすまいを、1/10模型の世界に再現してきました。製作の前には必ず現地に出かけ、現在住んでいる家や博物館に展示されているものを調査してきます。

模型はこれまでに、東京、札幌など全国数カ所で展示されています。

宮崎さんの著書には次のようなものがあります。

『ミニチュアでみる世界の台所』（福音館書店）
『台所から覗く北の国と南の国』（原書房）
『世界の台所博物館』（柏書房）

3月2日

北方民族のことば

講師　大島　稔 氏（小樽商科大学）

当館ではこれまで「ことば」に関する講座は少なかったのですが、熱心な参加者を多数迎え、平成8年度最後の行事として標記の講座を開催しましたので、以下に概要を報告します。

＊　＊　＊

まず、北方とはどこを指すのかについて考えてみると、学問分野によっても定義や範囲は異なり、極北圏（英語でArctic）といえば北緯65度以北を指し、周極圏（同じくCircumpolar）というともう少し広くなる。北方はもっと曖昧（あいまい）な言い方であり、どこを基準にするかが問題だが、本日は私の調査してきた経験から、陸づたいあるいは海（島）づたいに北海道と接しているサハリン、千島、カムチャツカ半島、チュコト半島からアリューシャン列島、アラスカといった地域を取り上げてみたい。

この地域は「環北太平洋地域」ともいうことができ、二つの大陸に分断されているようにみえるが、かつて人類の移動があったとされ、共通する生活様式が多いなど文化面での関係が指摘されてきた。もちろん言語的なつながりについても研究が続けられている。言語分布の特徴を挙げると、狭い地域に非常に多くの異なる言語が存在していて、特に両端にあたるサハリンからアムール川流域と北アメリカ北西海岸地域に密集している。世界的にも言語密度が高い地域ということができるが、なぜこのような状況になったのだろうか。

言語学では、言語間の親縁性や時間的変化を探るための方法がいくつかあり、これらを解明すれば民族の移動などを知る大きな手がかりとなる。例えば、ルーツを遡（さかのぼ）ったとき一つにたどりつくことができる諸言語を語族と呼ぶ。ウイルタ語などのサハリンからアムール川流域の多くの言語は東北アジアに広がるツングース語族に属していて、これは比較的新しい時代に西から進出してきたと考えられている。隣接する地域でも日本語や朝鮮語は単独の言語である。もっと北東よりには、古アジア諸語と呼ばれる系統のわからない多くの孤立言語がある。ここではその全容を話す時間はないので、長い時間を経てもあまり変化せず古い特

徴を残しやすいといわれる数詞を例に、言語の家族関係とはどのようなものか、実際に録音テープを聞きながら音や構造を比較して確かめてみたい。

アイヌ語の数詞は日本語と同じように、物を数えるときと人を数えるときなど数えるものによって変化する。また語尾のk、t、pなど口内で閉じを作るが空気を破裂させない内破音を多用する。これは朝鮮語にも多いが、日本語にはみられない。アリュート語とエスキモー語（セントラル・ユピック）は、1、4の語が似ており、5はそれぞれ「手」「腕」という意味で、これらからも二つの言語の関係の近さがわかる。

チュクチ語には性別によって発音の違うことばがある。チュクチ語西部方言とコリヤーク語カラガ方言を比べると2～5までは「なまり」程度の違いしかなく、6～9までは5に1～4の数字を足していく構造となっており、10は同じ語であるなど、異なる言語とはいえないほどである。

ツングース諸語のエウェンキー語、ウイルタ語、満州語では2～10までが非常に似ている。地域的には近いが、ニブフ語は全く異なることがわかる。このように各民族のことばを集め比較することを通じて、北方民族の特徴を明らかにしていきたい。

＊　＊　＊

「ひふみよ…」という日本語の数詞についても、「み」の倍が「む」、「よ」の倍が「や」と同じ行の音になっていることや、20を「はつか」「はたち」というように特別な言い方をすることなど、ふだん使っていることばの中にも特徴的な構造があることに気づかされた、興味深い講座でした。

参加報告　氷海の民シンポジウム　二風谷アイヌ文化博物館シンポジウム

第12回　北方圏国際シンポジウム・分科会

第３回　氷海の民シンポジウム

開催日：平成９年２月３日（月）
会　場：紋別市文化会館

紋別市で毎年２月に開催される「北方圏国際シンポジウム－オホーツク海と流氷－」（北方圏国際シンポジウム実行委員会主催）は、海洋や海氷に関わる学際的最先端の研究成果が発表される場として関係者の注目をあつめてきました。さらに同シンポジウムに関連する多彩な事業展開のひとつとして、『氷海の民シンポジウム』（北の文化シンポジウム実行委員会等主催）が２年前から開催されています。

今回の『氷海の民シンポジウム』では筆者も講師の一人として「アイヌ民族と海獣狩猟」の演題でアイヌの海獣狩猟文化について報告させていただきました。次いで講演された美幌博物館学芸員の宇野裕之さんは「オホーツク海の海獣類の生態」と題し、オホーツク海および近海のアザラシ類５種を中心とした海獣類の生息状況や生態について、サハリン沿岸での調査も含め航空機や陸上からの調査の成果をスライドを交え紹介されました。

午後のプログラムは国内外で活動するオキさんによるサハリン・アイヌの伝統的弦楽器トンコリの演奏で、伝統的な曲目やオリジナル曲の演奏を２時間近く堪能（たんのう）させていただきました。熱気を帯びた演奏にもまして、楽器としてのトンコリに対する見解が大変印象に残りました。オキさんは博物館などに収蔵されているトンコリを目にして、どうしてもっと丁寧に作られなかったのかと不満を感じてきたそうです。やがて幾本かのトンコリ製作を経て、音楽的に完成度の高いトンコリができました。しかし、音はたしかにきれいですが、演奏しているうちに、なにかつまらなさを覚えるようになったといいます。そして、「建付が悪い」、あるいは“ファンキー”と表現されましたが、博物館で目にする、どことなく出来がいま一つの「建付が悪い」トンコリこそ、ジャズ音楽でいうところの“ファンキー”な音を奏でるものであって、これが本来のトンコリではとの思いに至ったといいます。

（学芸課長　渡部　裕）

二風谷アイヌ文化博物館シンポジウム

開催日：平成９年２月28日（金）
会　場：平取町立二風谷アイヌ文化博物館

標記シンポジウムに、研究の報告者ならびに討論の助言者として参加しましたので、以下に概要を報告します。今回のテーマは「現代のアイヌ文化」の第２年次「民族工芸の変容と展開」で、工芸家をはじめアイヌ文化を担っている人たちと、研究者や学生、地元の人たちなどが参加しました。

午前は「アイヌの民具をみる視点」という演題で、武蔵野美術大学教授の相沢韶男氏が講演しました。福島県下郷町で「草屋根の村の文化」の保存に青春をかけてきたとおっしゃる講師は、その後、萱野茂氏の著作『アイヌの民具』の実測図を描いたことなどを通じて、和人の文化もアイヌ文化も保存をめぐる問題の根幹は似ており、地方自治体はもっと自立すべきと苦言されました。そして、海外のさまざまな民族文化を見てきた経験からも、自然を大切にする生き方に学び、先住民とともに何ができるかを考えたいと述べられました。

続いて、私は「民族工芸変容の歴史的過程に関する一試論」として、江戸期からのアイヌの工芸の変遷をたどり、またイヌイトやサミなどの近年の取り組みについても紹介しました。

午後は工芸に携わってこられた方々を提言者とするパネル討論で、小川早苗氏は「民族衣装をつくり続けさせた想い」、貝澤徹氏は「現代生活にいかしたい伝統の技巧」、高野繁廣氏は「古い木彫作品に学びながらの創作」、野本正博氏は「伝統を受け継ぐ方法の模索の中で」という題でそれぞれお話しされました。そして二つのサブレポートの後討論に入り、現代社会の中で伝統的な素材・技法・モチーフなどをいかに残し、それらを活（い）かしながらも、新しい手法をどう取り入れていくかといったことや、アイヌ文化の伝承者としての部分と工芸家としての個人の創意工夫とを分けて考えているかなどについて、活発な意見交換が行なわれました。ここでは書き尽くせませんが、参加者の経験に基づく重く熱心な発言に、大いに考えさせられる内容ばかりでした。

（学芸員　齋藤玲子）

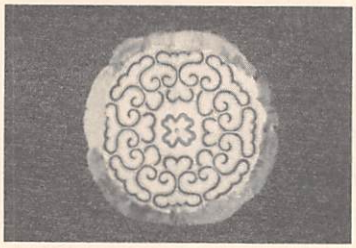
News

■寄贈資料紹介

○ウイルタの皿敷きほか

旭川市の河野廣氏から以下の資料が寄贈されました。

皿敷き（ウイルタ）１点（写真）
投げ縄片（ウイルタ）１点
パイプ（ウイルタ）１点
35㎜ネガフィルム(白黒)182コマ
35㎜ネガフィルム(カラー)６コマ
カラープリント３点



河野廣氏寄贈のウイルタの皿敷き

■執筆者・出版社から贈呈を受けた書籍（１～３月）

・河野廣　1991　『解説付写真集　幻の馴鹿部隊』　河野廣
・河野廣　1996　『幻の馴鹿部隊補足記事』　河野廣
・池上二良　1997　『ウイルタ語辞典』　北海道大学図書刊行会
・小谷部全一郎（生田俊彦訳）1991　『ジャパニーズ　ロビンソン・クルーソー』　皆美社
・菊池俊彦、天野哲也、石田肇　1996　『オホーツク文化と靺鞨・渤海・女真文化の間の交流関係の研究』　北海道大学文学部

■主な来館者

2/25　国立歴史民俗博物館
助教授　設楽博己氏

3/9　(社)北方圏センター
事務局長　山本孝氏
事業部長　新井進氏

3/18　大阪府立弥生文化博物館
館　長　金関恕氏
学芸員　宮野淳一氏

■その他の行事報告

1/25　博物館クラブ「イグルーづくりに挑戦」
1/26　講座「ミュージアム映写室」
2/8　博物館クラブ「ペーパークラフトでつくるきたのすまい」

＊　＊　＊

・3/11に当館講堂において第３回資料収集評価委員会が開かれました。

■OMI for SCHOOL No．1 発行

小学校団体用利用案内を発行しました。どうぞご利用下さい。

みんぞく
こうこ　　in HOKKAIDO
はくぶつかん　（１～３月）

※このコーナーでは、当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

1/23　里帰りしたバラートシのアイヌ民俗資料：ハンガリー人類学者バラートシの資料、道開拓記念館、帯広百年記念館で展示／D(タ)
3/9　シカ追い猟“正式復活”阿寒、アイヌ民族：伝統的な「シカ追い込み猟」が約120年ぶりに復活／AS
3/13　道内にも弥生人いた？：伊達で出土の腕輪、渡来系と同型／D
3/21　アイヌ語新聞創刊：「アイヌタイムズ」季刊紙として／M
3/29　違いを実感！樺太アイヌ語　弟子屈で講習会始まる：１週間の特別講座、23人が参加／D

＊AS：朝日新聞、　D：北海道新聞
M：毎日新聞　　Y：読売新聞
複数紙掲載の場合は、扱いの大きい方を紹介しています。

◇◇職員の異動◇◇

・退職（3/31付）
管理課長　歌川靖雄
・採用（4/1 付）
管理課長　今野　博
（北海道北見北斗高等学校から）

☆観覧者動向（１～３月）

（人）

	常設展示	企画展
１月	525	－
２月	1,642	1,374
３月	1,706	923
計	3,873	2,297

※平成８年度の常設展示観覧者は36,611名でした。

§編集後記§

本号から編集担当になりました中田です。担当が替わって「何か新しいことを」ということで、とりあえず「みんぞく…」のコーナーを再開してみました。どうぞよろしくお願いします。

（学芸課　中田篤）

北方民族博物館だより
―第　25　号―
1997年４月25日発行

編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093　北海道網走市字潮見313-1
ＴＥＬ　0152-45-3888　ＦＡＸ　0152-45-3889